

特論3

尼崎の歴史・文化財施設1

地域研究史料館を 利用する



地域研究史料館閲覧室



下張りはがしボランティア作業

「？」を抱き、扉を開けたら 私は大学の卒業論文で、

尼崎地域の土地区画整理事業の歴史を調べました。なにげなく大正期以降の地図を眺めていたら、尼崎地域に農地が広がっていたことに驚き、そしてそれが徐々に、あるいはときに急速に、宅地や工場地域へとすぐたを変えていくさまに、興味を惹かれました。

なぜ尼崎に、こんなことが起こったんだらう？

そんな「？」をぼんやり抱き、私は初めて尼崎市立地域研究史料館を訪れました。そしてそこで私を待っていたのは、想像だにしていなかった、数々の出会いでした。

まず、同館所蔵の「森源逸氏文書」や「太田善夫氏文書」など、大正期から昭和戦前期の土地区画整理事業に関する史料との出会いがありました。私はこれら千点以上にのぼる史料群と格闘することになります。史料館に毎日通い、一点一点写真撮影や写し書きをし、史料を読み込みました。私の力では太刀打ちできない史料にぶつかったときには、職員さんのサポートを受け、乗り越えていきました。

また、史料館を通して、元尼崎市職員で長年土地区画整理事業に携わってこられた枝川初重さんと出会うことができました。数十年のキャリアにもとづいたお話の数々は、さまざまな立場の人たちが、それぞれの事情や信念で、地域の新たなすがたを作り上げていったヒューマン・ドキュメンタリーそのものでした。それは、文献資料やインターネット検索では決して出てくることのないものです。

こうした史料や人との出会いを幾度も幾度も繰り返し、私は卒業論文を書き上げることができました。⁽¹⁾ ぼんやりとした「なぜ？」が、史料館の扉を開けたその

日から、たくさんの「そうか！」へと姿を変えていったのです。そしてまた、次に繋がる新たな「？」も得てゆきました。

そんな私の経験を振り返りながら、地域研究史料館の使い方―史料館で得られるさまざまな出会い―をご紹介します。

情報と出会う 史料館から、私たちはいろいろな手

段で、多くの情報が得られます。公式ウェブサイトでは、検索システムや公開目録で、どんな史料を所蔵しているかを調べることでできます。またウェブ版尼崎地域史事典「アペディア」(apeia)やウェブ版図説尼崎の歴史、尼崎藩家臣団データベース「分限」^{ぶんげん}など、さまざまなデジタルアーカイブが公開されています。

さらに公式ブログやフェイスブックでは、史料館の日々のようすが発信されています。もちろん、電話やファックス、メールで問い合わせることもできます。自分にとって便利な方法、楽しめるコンテンツで、史料館から情報を得ることは、地域の豊かな歴史に触れる、大きなはじめの一步になります。

史料と出会う 史料館では、実際に史料を閲覧する

ことができます。実物の史料には、ウェブ上のデジタルデータからは伝わってこない、匂いがあります。手触りがあります。うつすらと残る、何度も書き直した跡を見つけ、当時の人たちの試行錯誤のようすが浮かび上がってくることもあります。実物の史料を、みずからの五感を使って調べることで、地域の歴史がより身近に、面白く感じられます。

『史料を使って歴史を調べる』なんて、むずかしそう、面倒そうというためらいも、大丈夫です、心配はいりません。史料館では職員さんが、私たちの調べ

ものをお手伝いしてくれます。これを、「レファレンス・サービス」といいます。

史料館は国立国会図書館の「レファレンス協同データベース（レファ協）」事業に参加しており、どのようなレファレンスを行なっているのか、具体的な事例をレファ協のサイト上に紹介しています。これを見れば、史料館には、私たちをサポートしてくれる頼もしいナビゲーター、アドバイザーがいることがわかるでしょう。

「史料館って、専門家や研究者が行くところじゃないの？」

そんな言葉を耳にすることがあります。いいえ、そうではありません。地域の歴史に「？」が浮かんだすべての人が、思う存分、利用する場所なのです。

人と出会う 史料館で出会うのは、史料だけではありません。地域を生きてきた、今まさに生きている、人との出会いも待っています。

例えば地域の歴史を調べる手法のひとつに、「聞き取り調査」があります。⁽³⁾ 史料館は、お話ししてくださる誰か（話し手）と私たち（聞き手）を引き合わせてくれるサポートも担っています。

私が史料の文字を追うだけで精一杯だったとき、元市職員の枝川初重さんを紹介してもらいました。枝川さんは、関わった事業のエピソードをたくさんお話ししてくださり、調べ方のアドバイスもいただきました（枝川さんは、ご自身でも尼崎地域の土地区画整理事業の歴史について調べ、寄稿しておられます⁽⁴⁾）。それからは、土地や人の名前、単なるできごとでしかなかった史料の文字列に、土地の匂い、人々の息遣い、できごとの臨場感を感じるようになりました。

特論3

尼崎の歴史・文化財施設2

文化財収蔵庫・田能資料館



文化財収蔵庫展示室 尼崎城下復元模型を囲んで学芸員の説明を聞くボランティア・メンバー



田能遺跡史跡公園 かや葺き屋根が葺き替えられた円形平地式復元住居
平成28年1月撮影

話し手の語りに触れると、自分とは無関係に、どこか遠くにあるような気がしていた個人の歴史、地域の歴史、国家の歴史に、現実感や親近感が湧きます。史料館ではそんな、日常では得がたい感覚を経験することができるのです。

場と出会う 史料館は、講座やイベントを企画・支援し、私たちが地域の歴史と触れ合う場づくりも行なっています。また、史料整理ボランティアをはじめとして、史料館はさまざまな作業メニューの市民ボランティアを募集しています。それは、私たちが、史料館を支える力となる場です。

「私たちが、史料館を支える？」
それって一体、どういうことでしょう。

私たちが史料館を利用し続けるには、史料館が絶えず地域の史料を収集・整理・保存し、公開し続けなければなりません。しかし史料の数は膨大で、形態も多種多様。公開に至るまでには多くの丹念な作業を要します。そこで私たちが、その作業の担い手となり、公開までのプロセスを支えるマンパワーとなるのが、史料整理ボランティアです。

まだ誰の目にも触れていない史料の山には、「？」や「！」がいっぱい。それをひとつひとつ紐解いていく楽しさは、史料整理ボランティアの醍醐味です。そして、私たちが史料館を支えることで、史料館と双方向的な関係を築き、私たち自身が地域の歴史を次世代に繋げていく力となる面白さがあります。

講座、イベント、ボランティア。自身の興味関心、体力や生活スタイルにマッチする場が、史料館のどこかにきっとあります。

「？」と「！」の宝箱 「尼崎」は、どうして「尼崎」

はじめに 私たちが住む尼崎市では、弥生時代以降

の多くの遺跡が見つかっています。現在より気候が温暖で海水面が高かった縄文時代、地域の大部分は海だったのです。それが弥生時代以降しだいに陸地化し、人々が住み始めました。現在の市域北部を中心に、弥生時代の遺跡が確認されており、約二、〇〇〇～三、〇〇〇年の間に、いまの市域ができたと考えられます。

私がはじめて地元の遺跡を見学したのは、田能遺跡でした。このときのことはあまりくわしく記憶していません。この経験が、私が考古学を勉強する原点となりました。

この当時、私は園田学園女子大学の聴講生でした。それで、大学の授業でウェブサイトに市内の遺跡を紹介する記事を書くため、当時はまだ立花小学校の敷地内にあった市立文化財収蔵庫を訪ねました。まだ弥生土器と土師器の区別の知識もなく、収蔵庫の学芸員の先生に教えてもらいながらの取材でした。一階には、出土遺物や民俗資料が所せましと展示されていました。現尼崎市域に連綿と続く古代からの歴史を、あらためて認識したのも、このときからのことです。

文化財収蔵庫の展示 文化財収蔵庫は、平成二一年一月に現在地の南城内、旧市立城内中学校の建物に移転しました。昭和八年（一九三三）に尼崎高等女学校校舎として建てられ一三年に増築されたものです。常設展示室に続いて、平成二六年度には企画展示室も開設されました。

尼崎城 収蔵庫に入って最初に目にするのが尼崎城の展示です。収蔵庫がある場所は、近世初頭に戸田氏鉄が尼崎城を築いた、その本丸跡にあたります。尼崎

という地名になったの？

テレビアニメ「忍たま乱太郎」の登場人物に、尼崎の地名にちなんだ名前が多いのはなぜ？

尼崎に、空襲はあったの？

阪神・淡路大震災では、どんな被害があったのだろうか？
津波被害に遭ったことはあるのかな？

さあ、ふと浮かんだ「？」を抱き、史料館の扉を開けてみましょう。その扉の向こうには、期待通りの「！」、思いがけない「！」、あるいは新たな「？」を得られる、出会いの尽きない世界が広がっています。
(注)

- (1) 卒論後もこのテーマの研究を継続し、博士論文にまとめた。これを再構成したのが、拙稿「昭和戦前期における旧大庄村地域の土地区画整理事業―旧大庄村芋地区森源逸氏文書―を手掛かりとして―」（『地域史研究』第三六巻第二号）である。
- (2) <http://cd.ndl.go.jp/reference/>
- (3) 本書第Ⅲ部第六章第二節〈史料編〉5「聞き取り調査の方法」参照
- (4) 枝川初重「尼崎市北部耕地整理事業について―昭和初期、別所・東難波における宅地開発―」（『地域史研究』第三二巻第三号、二〇〇一・三）。また枝川氏は、尼崎都市・自治体問題研究所の所報『尼崎まちづくり研究ノート』の第一号～第三号（一九九九・一一～二〇〇一・一二）に、現尼崎市域に施行された耕地整理事業・土地区画整理事業に関する論考計四本を寄せておられる。

〔執筆者〕森本 米紀

城は戸田氏から青山氏、そして松平氏へと受け継がれ、明治初年まで存続していましたが、明治六年（一八七三）の廃城令により地上の建物や石垣などが取り壊され消滅してしまいました。地下には石垣の一部などの遺構が残っており、発掘調査も行なわれています。

収蔵庫の尼崎城展示の中心は、縮尺五百分の一の尼崎城下復元模型です。その隣には、天守・御殿など尼崎城本丸が縮尺百分の一で復元されています。尼崎城と城下町の図面や絵図などが残っているのです、かつての様子を正確に復元することができるのです。

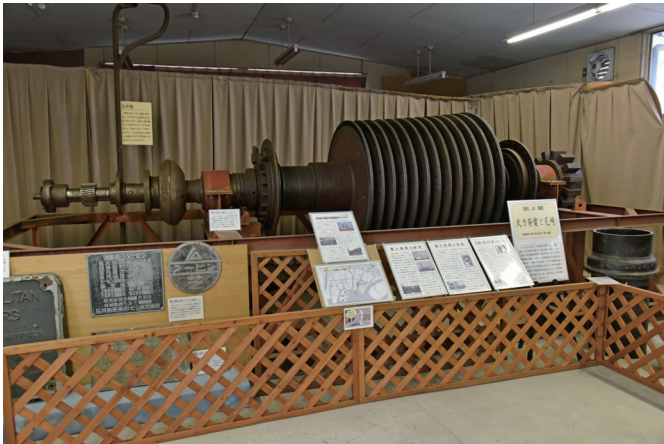
尼崎城本丸跡発掘調査の際に作製された土層の剥ぎ取り標本、この発掘調査や城内の武家屋敷、城下町の発掘調査で出土した茶碗や鉢などの陶磁器、土人形、本丸御殿に葺かれていた鬼瓦なども展示されています。

弥生時代 市内には、多数の弥生時代の遺跡が存在しています。文化財収蔵庫には、弥生時代以降の遺跡から出土した遺物が展示されています。

昭和三四年から三七年に発掘調査が行なわれた上ノ島遺跡出土の弥生土器は、近畿地方の弥生時代前期の基準資料として使われました。この遺跡地には、初期の農耕集落があったことがわかっています。

東武庫遺跡は、平成五年の調査により、弥生時代前期前半から中期初頭の方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}二基が発掘されました。弥生時代前期前半の木棺に使われていた板材は、年輪年代法により、紀元前四四五年という年輪年代が測定されました。

武庫庄遺跡は、阪神・淡路大震災後の復興共同住宅建設にともない平成八年に発掘調査が実施され、弥生時代中期後半の独立棟持柱を持つ大型掘立柱建物跡が見つかりました。建物の規模は大きく、地中に残存し



文化財収蔵庫に展示される旧尼崎第二火力発電所のタービンローター

た柱は年輪年代法により、紀元前二四五年からあまり下らない時期に伐採されたヒノキ材であることがわかりました。この柱も展示されています。

東園田遺跡では、マンシヨン建設にともなう発掘調査が平成一五年に行なわれ、八月に現地説明会がありました。出土した大量のタコ壺のなかの一点にシカの線刻が描かれ、このシカの絵柄は稲作と結びつけて考えられています。雄シカは年に一度角が生え変わり、稲作も年に一度収穫します。稲作を毎年無事行なうことがであることを願い、シカの角にあやかるように祈ったのではないかと考えられるのです。その後、平成二五年三月にもマンシヨン建設にともなう発掘調査の現地説明会があり、多数の市民が見学に訪れました。東園田遺跡からは、弥生時代から古墳時代にかけて、

休講）。そのときどきの研究や、市内のホットな話題が紹介され、文化財収蔵庫や田能資料館の学芸員の先生方が講師を務めています。

田能資料館と史跡公園 尼崎・伊丹・西宮三市共同工業用水園田配水場の工事現場で、田能遺跡が発掘されたのは昭和四〇年のことです。大量の弥生土器が出土し、緊急発掘調査が行なわれました。土壇墓、木蓋土壇墓、木棺墓、壺・甕棺墓が出土し、この遺跡の発見を通じて近畿地方の弥生時代の墓制がはじめて明らかになりました

発掘は工事に追いかけられるような過酷な状態で行なわれ、大学教員や学生、市民や中学生までもが発掘に加わりました。その結果、貴重な遺跡であることが明らかとなり、市民団体その他による活発な保存活動が取り組まれた結果、遺跡が保存されることになりました。現在史跡公園となっている場所が保存地で、遺



田能資料館の展示室

青銅製鏡制作体験の様子 平成26年11月16日撮影
田能資料館提供写真

つまり卑弥呼の時代の遺物もたくさん出土しています。また平成二六年には、園和小学校の耐震化工事にもない深田遺跡が発掘されました。こういった調査の成果を、収蔵庫の展示を通して学ぶことができます。

古墳時代から中世 古墳時代前期の前方後円墳である水堂古墳は水堂須佐男神社の境内にあり、粘土郭の遺構が覆屋内に保護されています。出土品は収蔵庫にあり、三角縁神獣鏡（本書第一部に写真掲載）を展示室で見ることができます。水堂古墳の粘土郭に残っていた朱は、奈良大学の西山要一教授が分析された結果、高純度の水銀朱であることが判明しました。築造された当時は海岸近くに立地していた、地域の首長墓と考えられます。このほか、墳丘の土取り作業中に出土した大塚山古墳の副葬品の複製なども展示されています。

歴史時代の展示物としては、猪名寺廃寺の鴟尾片があります。鴟尾全体が復元され、その巨大さがわかります。猪名寺廃寺は法隆寺式伽藍配置の古代寺院で、猪名氏の氏寺だった可能性が指摘されています。また、大物遺跡の出土品として、経石や交易により伝来した陶磁器なども展示されています。尼崎地域は、中世には神崎川・淀川を通じて京と密接なつながりがあり、瀬戸内一円や海外との交流・交易も盛んでした。

産業・民俗資料 《工都尼崎のあゆみ》コーナーには、かつて尼崎市水道の水道管として使用されていた木製管や、いまは姿を消した火力発電所のタービンローター、東京農工大学附属繊維博物館から寄贈されたリング精紡機などが展示されています。《ちよっと昔のくらしの道具》コーナーには、あんどん、あんかや自転車など懐かしい昭和の生活用品を見ることがができます。

企画展示 平成二六年度から年に五回の企画展示が

構を地下に保存し、上に盛り土をかぶせた構造になっており、地上には竪穴式住居なども復元されました。

田能遺跡の出土遺物は、資料館に保管・展示されています。 弥生人のお墓から見つかった管玉の首飾り（本書第一部に写真掲載）や白銅製釧（腕輪）、銅剣鑄型といった、貴重な遺物の数々を見ることがができます。銅剣鑄型の出土は、かつて近畿を中心とする銅鐸文化圏と九州を中心とする銅矛銅剣文化圏として、地域的に区分されていた説の見直しに寄与する発見でした。ほかにも讃岐や二上山（奈良県・大阪府の府県境付近）のサヌカイト、糸魚川など日本海沿岸に産する硬玉（ヒスイ）・碧玉製の勾玉・管玉、紀州の結晶片岩を用いた石包丁、畿内周辺や遠く関門海峡付近の土器などが見つかっており、列島各地との交流があったことがわかっています。

工事のため保存できなかったお墓も、資料館の展示室に保存・展示されています。また、史跡公園内のお墓があった場所の地上には花壇が配置されていて、遺構の目印になっています。

体験学習 田能資料館では土器作りや勾玉作り、古代米の田植え・収穫など、さまざまな体験学習が行なわれています。「古代のくらし体験学習会」と銘打つこの企画に参加することで、子どもも大

行なわれ、収蔵庫所蔵資料などが展示されています。なお、館外での開催となりますが、企画展に加えて年一回秋の時期に、東桜木町の尼信会館を会場とする市教育委員会収蔵資料展が催されています。

文化財収蔵庫の活動 私が市内の遺跡に興味を持って調べていたとき、奈良大学文学部文化財歴史学科の通信教育部の募集があり、これに応募して平成一七年に編入学し、本格的に勉強を始めました。市内の遺跡を巡り歩き、また、卒論研究が古墳でしたので、市内や近隣の古墳を探し求め、なかに入ることができる古墳の場合は石室の見学に行きました。卒業後に学芸員資格の勉強も始め、無事取得することができました。ちょうどその頃、収蔵庫の「文化財資料保存・活用サポートボランティア」養成講座が始まりました。平成二一年に第一期の募集があり、私はただちに応募しました。一年間の研修で、市内の遺跡や出土遺物についての講義、土器の洗浄実習、他市博物館や市内の遺跡見学などに参加し無事修了しました。

その後は、サポートボランティアの一員として活動しています。遺物の洗浄・整理作業は、大きな土器資料の場合もありますが、ほとんどが小さな破片です。古代の人たちの生活必需品だった土器、お米などの食料を煮炊きしていた生活が染みついています。月例会もあり、講師の先生方の遺跡や遺物に関する研究を学び、遺跡や歴史施設を訪ねて勉強を続けています。

さらに収蔵庫では、綿・藍・尼いもを育て、綿繰り・糸紡ぎ・機織り・藍染などの体験学習を支援し、尼崎ゆかりのお話を人形劇で伝える活動などに取り組む「れきし体験学習ボランティア」も活動しています。

月一回の水曜歴史講座も開催されています（八月は

人もひととき、弥生人の気分を味わうことができます。

平成二六年十一月、体験学習会にボランティア仲間と参加しました。弥生時代の鏡を、弥生時代と同じように制作していくのです。最初に、九州大学総合研究所博物館の岩永省三先生から、弥生時代の青銅製の鏡や武器についての講義をお聞きしました。そのうえで、まずは砂を固めた鑄型に、参加者たちが金串を使って鏡の文様を彫っていきます。彫り終わると、鑄造工場の技術者である笹部一郎先生と前島昌広先生が、鑄型に千二百度にも熱した青銅を流し込みます。昼休みを間にはさんで、鑄型から鏡を取り出し、磨いていきます。とても力のいる作業で、一生懸命磨きましたが、終了時間までかかって、鏡面に顔が映るようには磨けませんでした。

鑄型づくりから「ゆ」の流し込み、研磨までの一連の作業すべてを館内で行なう本格的な体験学習は、全国的にみても田能資料館が最初の事例だということです。

おわりに 尼崎市の歴史を理解していくうえで、遺跡や文化財の存在を無視できません。尼崎の土地に人が住み始めたことが遺跡や遺物で確認できる弥生時代以来、それぞれの時代の人たちが作り、使ってきた道具のお椀やお皿などは材質が違っていますが、その形態は現在とほぼ同じです。私たちサポートボランティアは、遺跡から出土した土器などの遺物を洗浄しながら、むかしの人たちの生活を想像し、対話しています。

これからも、地域のアイデンティティを高めるために、遺跡や遺物、文化財を後世に残し、伝えていくための一員になればと思っています。

（執筆者）横地 悦子